

日本短角種を代理母とする 黒毛和種子牛の放牧育成

日本短角研究チーム

山口 学

YAMAGUCHI, Manabu



《短角の現状》

日本短角種（短角）は北東北の広大な牧野や山林における放牧に適用するように改良され、飼われてきた地方特定品種です。短角の放牧は北東北の草・土地資源の有効利用だけでなく、景観維持や環境保全など重要な役割を担っています。しかし、近年の脂肪交雑（サシ）が重視される評価基準では赤身肉が主体の短角は価格が安いいため、飼養農家の休・廃業がすすみ、その数は年々、減少しています。



写真/放牧地における短角母牛と黒毛子牛

《短角を増やす》

短角の増頭には、まず飼養農家の収益が向上、経営が安定し、安心して短角の飼養に取り組める技術を提案する必要があります。そこで短角の乳量が抜群に多く、放牧地でも子育てが上手な能力を活かして、短角母牛に市場価値の高い黒毛和種（黒毛）の胚移植を行い、代理母として妊娠、分娩させ、さらに親子放牧しながら優良に育成する技術の開発を目指しました（写真）。

《発育の特性》

短角母牛に育てられる黒毛子牛は、飲乳量が過多による下痢などの体調不良もなく、生時から1カ月齢にかけての一日あたりの体重増加量（日増体量）が標準発育に比べて著しく高くなりました（図1）。さらに放牧期間中、成長に伴う補助飼料をほとんど与えなくても、放牧終了の9カ月齢時まで標準発育と変わらぬ発育をしました（図2）。今後は、放牧後半の子牛の発育をさらに改善する研究を進めていきたいと考えています。

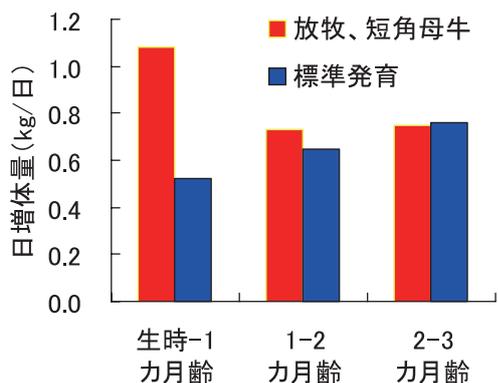


図1/月齢ごとの日増体量
標準発育：日本飼養標準・肉用牛（2008年版）より

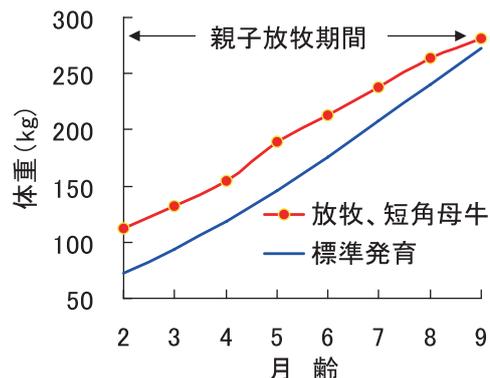


図2/放牧期間中の発育